

新収貴重書展

二〇二八
二〇二〇年度収蔵



2026年6月11日(木)～9月23日(水)

休館 6月30日(火)、8月10日(月)～16日(日)、
8月23日(日)～24日(月)

会場 明治大学中央図書館 1Fギャラリー(入場無料)
〒101-8301 東京都千代田区神田駿河台1-1
TEL 03-3296-4250

時間 図書館の開館時間中にご観覧いただけます。
<https://www.meiji.ac.jp/library/>

新収貴重書展(2018～2020年度収蔵) 出展リスト

	展示番号	書名など	請求記号	展示期間	
蘆田文庫	1	ケンペル(1651-1716), ショイヒツアー(1702-1729) 『長崎図(長崎の町, 付 港および近郷)』 [アムステルダム, 1732年?]	AS03/29//H		
	2	ペラン(1703-1772), デュラン(1700-1770)刻 『長崎図(長崎の港と町の図)』 [パリ, 1763年?]	AS03/30//H		
	3	筆写者不明 『蝦夷絵図』 文化4(1807)年写	AS10/74//H		
江戸文藝文庫	4	曲亭馬琴(1767～1848)作／北尾重政(1739～1820)画 『北國順禮縁起』 3巻合1冊 寛政9(1797)年自序 蔦屋重三郎板	913.57/TA1-67//H		
	5	山東京伝作／歌川豊国画 『礼者集 二』 半紙本1冊 享和2(1802)年刊 鶴屋喜右衛門板	913.57/SA1-84//H		
	6	亀田鵬齋(1752～1826)自筆 『亀田鵬齋先生書』 法帖一帖 文化3(1806)年成	728.21/17//H		
	7	振鷺亭主人(?-1815)著／蹄齋北馬(1770～1844)画 『畝討猫魔屋敷』 1冊 文化5(1808)年刊 上総屋忠助・村田屋治郎兵衛板	913.56/SH1-4//H		
	8	曲亭馬琴(1767～1848)作／勝川春亭(?～1824)画 『刀屋半七浮名仇討／松之月新刀明鑑』 半紙本2冊 文化7(1810)年刊 和泉屋市兵衛板	913.56/TA1-32//H		
	9	柳下亭種員(1807～1858) 自筆稿本 『白縫譚』 第17編上巻1冊 嘉永7(1854)年以前成	913.57/Ry3-6//H		
	参考	柳下亭種員(1807～1858) 刊本 『白縫譚』 第17編上巻1冊. 嘉永7(1854)年 藤岡屋慶次郎	913.57/Ry3-2//H		
	10	彩霞園柳香(1857～1902)著／梅堂国政(1848～1920)画 『蓆旗群馬嘶』 3編9冊 明治14(1881)年刊 金松堂	913.6/SA1-1//H		
	11	松村桜雨(生没未詳)著／松齋吟光(1853～1902)画 『昇平鼓腹三府膝栗毛』 3編9巻 明治14(1881)年刊 島鮮堂板	913.6/MA1-1//H		
	12	伊東専三(1850～1914)編／河竹其水(1816～1893)披閱／歌川國峯(1861～1943)畫 『正札附辨天小僧』 2編2冊 明治17(1884)年刊 滑稽堂	913.6/IT1-3//H		
	13	楊洲周延(1838～1912)筆 『馬琴著作當雙六』1枚 明治23(1890)年刊 森本順三郎板	798/15//H		
	日本近代文学文庫	14	三遊亭圓朝(1839-1900)口述；小相英太郎速記 『鶴殺疾刃庖刀』 明治20(1887)年11月 薫志堂	MB100/SA19-5//W	A
		15	三遊亭圓朝(1839-1900)口述；小相英太郎速記 『松の操美人の生理：俠骨今に響く賊胆猶ほ腥し』 明治22(1889)年5月 榮泉堂	MB100/SA19-4//W	B
16		村上浪六(1865-1944)著 『深見笠』 明治27(1894)年2月 春陽堂	MB100/MU2-3//W	A	
17		尾崎紅葉(1867-1903)著 『隣の女』 明治27(1894)年6月 春陽堂	MB100/OZ3-20//W	B	
18		小山内薫(1881-1928)著 『蝶』 明治42(1909)年4月 水野書店	MB100/OS1-9//W	A	
19		谷崎潤一郎(1886-1965)著 『蠶』 大正3(1914)年3月 鳳鳴社	MB100/TA30-42//W	B	
20		永井荷風(1879-1959)著 『ふらんす物語：新編』 大正4(1915)年11月 博文館	MB100/NA1-31//W	A	
21		尾形龜之助(1900-1942)著 『色ガラスの街：詩集』 大正14(1925)年11月 恵風館	MB100/OG8-1//W	B	
22		谷崎潤一郎(1886-1965)著 『蓼喰ふ蟲』 昭和4(1929)年11月 改造社	MB100/TA30-43//W	A	
23		内田百閒(1889-1971)著 『冥途』再版第3版 昭和10(1935)年12月 三笠書房	MB100/UC1-13//W	B	
24		永井荷風(1879-1959)著 『机邊の記』 昭和11(1936)年4月 青燈社	MB100/NA1-30//W	A	

	展示番号	書名など	請求記号	展示期間
<特別展示> 西江雅之文庫		(英語)		
	25	ルイス・キャロル(1832-1898)著／with artwork by 草間彌生 『不思議の国のアリス』 ロンドン 2012年	933.6/12//NI	
		(フランス語)		
	26	ルイス・キャロル(1832-1898)著 『不思議の国のアリス』 ニューヨーク 1972年	933.6/33//NI	
		(スペイン語)		
	27	ルイス・キャロル(1832-1898)著 『不思議の国のアリス』 メキシコ 1953年	933.6/11//NI	
		(フィンランド語)		
	28	ルイス・キャロル(1832-1898)著 『不思議の国のアリス』 ヘルシンキ 2010年	933.6/16//NI	
		(オランダ語)		
	29	ルイス・キャロル(1832-1898)著 『不思議の国のアリス』 ロッテルダム 1982年	933.6/19//NI	
		(ラトヴィア語)		
	30	ルイス・キャロル(1832-1898)著 『不思議の国のアリス』 リガ(ラトヴィア) 2011年	933.6/28//NI	
		(エストニア語)		
	31	ルイス・キャロル(1832-1898)著 『不思議の国のアリス』 タリン(エストニア) 1971年	933.6/29//NI	
		(中国語)		
32	ルイス・キャロル(1832-1898)著 『不思議の国のアリス』 北京 2010年	933.6/37//NI		
	(韓国語)			
33	ルイス・キャロル(1832-1898)著 『不思議の国のアリス』 ソウル 1978年	933.6/7//NI		
	(日本語)			
34	ルイス・キャロル(1832-1898)著；トーベ・ヤンソン絵；村山由佳訳 『不思議の国のアリス』 2006年3月 メディアファクトリー	933.6/47//NI		

【展示期間】

無印：2026年6月11日（木）～9月23日（水）
A：2026年6月11日（木）～7月31日（金）
B：2026年8月1日（土）～9月23日（水）

「新収貴重書展」の開催にあたり

明治大学図書館では、独自の収書基本方針に基づき、教育・研究に資する有意義な資料を長年にわたり収集してまいりました。その中には、学術的に貴重な図書や大型コレクションなど、特別な価値を持つ資料も含まれています。

たとえば、古地図の一大コレクションである「蘆田文庫」、近世文学の洒落本・読本・草双紙類を収めた「江戸文藝文庫」、近代日本文学の初版本などを収めた「日本近代文学文庫」、そしてその他の稀覯書などが挙げられます。すでに特色あるコレクションを形成した分野は、今後さらに充実・発展が期待されています。

こうした新収資料については、これまでも本ギャラリーで展示し、広く一般に公開してまいりました。今回は、2018～2020年度に収蔵された珠玉の資料を厳選してご紹介いたします。

さらに特別展示として、同時期に収蔵された文化人類学者・言語学者 西江雅之氏(1937-2015)の旧蔵コレクション「西江雅之文庫」の中から、世界各国語版の『不思議の国のアリス』も展示いたします。

しばし、紙の本が醸し出す奥深い世界にふれ、質の高い文化の薫りをお楽しみいただければ幸いです。

明治大学図書館

1957年、歴史地理学者として著名な蘆田伊人^{あしだ これと}が生涯かけて収集した古地図コレクション約2,000点を購入。内容は、世界図、北方図、日本図、地方図、町図、街道図、水路図、俯瞰図^{ふかん}など幅広い分野にわたる。日本図では、江戸時代初期の行基図^{ぎょうきず}や国絵図^{くにえず}、元禄期の石川流宣^{ともぶ}『本朝図鑑綱目』^{ほんちょうずかんこうもく}、江戸中期に民間図の主流をなした安永8年(1779)版の長久保赤水^{にほんよちろていぜんす}『日本輿地路程全図』、伊能図、明治期の地形図などが系統的に収集されており、日本地図成立史を知る上で有意義なコレクションとされている。

地方図には、当該地域ですでに失われてしまった貴重なものが含まれ、また世界図では、大黒屋光太夫が将来した両半球写図や、リッチ系の楕円形図などが所蔵されている。

1. ケンペル(1651-1716), ショイヒツァー(1702-1729)『長崎図(長崎の町, 付 港および近郷)』
[アムステルダム, 1732年?] 1枚 33.2×48.2cm AS03/29//H

E. Kaempfer, J. C. Scheuchzer / Anonymus . *La ville de Nagasaki avec le port et les environs.*
[Amsterdam : 1732?].

透かしあり。無彩。オランダ商館医師のケンペルは長崎滞在時(元禄3(1690)–5(1692))に木板刷りの長崎絵図(延宝頃、ca.1680)を入手していた。これを下図にケンペル自身が長崎図を描いた。この手書き図をもとにショイヒツァーが図を整えてラテン語のテキストで銅版に付し、ケンペル『日本誌』に収録した(Urbs Nangasaki cum portu & angio circumjacenti.)。ケンペル『日本誌』は初版がショイヒツァーの英訳本(1727)で、このラテン語の長崎図は1729年仏訳本(二ツ折版)にも用いられる。展示した図は、1732年に出版されたフランス語版(八ツ折版)に付されたものと推定され、テキストもフランス語に変じている(一部オランダ語並記)。中央に出島が描かれ、ここから見た上下左右に建物等が描かれ、テキストも下部分は出島の方向から読むように書かれていたり、あるいは右方向から読むものもある。長崎図の下には日本の貨幣図が付載されている。この長崎図はオッテンスの地図帳にひきつがれる。



2. ベラン (1703-1772), デュラン (1700-1770) 刻 『長崎図 (長崎の港と町の図)』 [パリ, 1763年?] 1枚, 23.7×37.6cm AS03/30//H

J.N. Bellin, Dheulland Sculp., *Plan du et port de la ville de Nangasaki*. [Paris : 1763?].

透かしあり。無彩。フランスの水路学者・地図製作者のベランはシャルルボワ『日本の歴史・地誌』(Paris, 1736) のために長崎図を作成した。ケンペル『日本誌』からの借用である。おそらくは1732年伝語版からと推量されるが、タイトルを変更し、まずコンパスローズを加えて方角を明確にし、建物等を簡易化し、下方のフランス語テキスト等も普通どおりに直した(この図をa図とする)。さらにベランはフランス小地図集等に使用するために、上記a図の両端をやや切りつめ、建物等を図式化したりして全体を簡易化した図を作成した(b図とする)。展示の図はb図と思われる。刻者デュランはa図にも関係する。



3. 筆写者不明 『蝦夷絵図』 文化4(1807)年写 1舗, 195.7×152.8cm. AS10/74//H

周知のようにそして不思議なことに、日本北辺の地理は18世紀中葉までヨーロッパにも日本にも不明の点が多かった。同様に、北海道・樺太・千島を含む蝦夷図にしても、正確な図の出現は幕末までまたなければならなかった。本図は、蝦夷図史上で、中間にあたる位置にあるとされる。(大ざっぱにみて北海道が初期の立てた俵形から後期の菱形への推移)。千島列島は、天明・寛政の幕府調査隊による実地の見分けにより、カムチャツカに至る弧状列島としてよく描かれており、当時の地理的認識を反映する。その一方、北海道・樺太の形は、旧態の国絵図に依りながらもその改新形とみられ、さらに西蝦夷(北海道西岸および樺太)沿岸には松前藩中の知行主が詳しく記載されるなど、当時の実情を反映しているとみられる。本図は10点ほどの同系図中、最大のものであり、北海道地図史の専門家高木崇世氏旧蔵の図である。元図は氏によれば寛政年間にかけて作成されたとされる。



1999年、本学文学部教授、故水野稔氏旧蔵書の一括購入を契機に創設された。

江戸時代後期の読本・合巻・人情本・洒落本・黄表紙・滑稽本などからなり、山東京伝『優曇華物語』初版本(文化元年)などがよく知られている。以後、これらの旧蔵書を核として、江戸後期の小説類やその関連資料を収集範囲に定め、図書館で毎年予算を計上してコレクションの拡充を図っている。

拡充の柱の一つが、元埼玉大学教授、故大久保忠国氏旧蔵「抱谷文庫」で、江戸時代の文芸および演劇関係の原本を多数収集していることで著名である。

図書館では、役者評判記・番付・せりふ本などの演劇関係資料、式亭三馬・山東京伝・山東京山・曲亭馬琴などの作品その他をまとめた草双紙類、狂言絵本類などジャンルごとに収集を継続している。

4. 曲亭馬琴(1767~1848)作/北尾重政(1739~1820)画『北國順禮縁起』 3巻合1冊 寛政9(1797)年自序 蔦屋重三郎板 913.57/TA1-67//H

曲亭馬琴作の黄表紙で本文庫には「北國順禮縁起」で登録されているが、これは別書名である。題簽は「北國順禮唄方便」で、登録書名としてはこのほうが普通のようなものである。本文用紙も傷んでおらず、中巻の題簽が残っているのも資料的に価値がある。

題名の「北國」とは、江戸戯作文学において江戸の北に当たる吉原遊郭を言うもので、その遊女の境遇を旅と西国巡礼めぐりに見立てた作である。堅物の馬琴としては珍しい題材だが、馬琴の性格はそのままで、京伝とは異なって、遊女に対する理解や共感は感じられない。馬琴の黄表紙は見立てと地口で発想されているものがほとんどで、黄表紙らしい軽妙さや洒脱さに欠け、作品数自体は多いものの、作として面白いものではない。馬琴が雄飛するのは、自分の気質や才能に合致した読本がブームとなった文化5年(1804)前後からである。



5. 山東京伝作／歌川豊国画 『^{れいしやしゅう}礼者集 二』 半紙本 1冊 享和 2 (1802) 年刊 鶴屋喜右衛門板
913.57/SA1-84//H

本書は、山東京伝の享和 2 年 (1802) 刊の黄表紙四作『通気智之銭光記』『吞込多靈宝縁起』『賢愚湊銭湯新話』『枯木廻花大悲の利益』の 4 作を合綴した編集本である。刊記には、同年刊の馬琴黄表紙 4 作・傀儡子(馬琴) 1 作・^{きのめでんがく}椒芽田楽 1 作・市場通笑 1 作の書名がある。他に『諺百首談』の名があるが、これは無形庵宗元『諺百種談』(寛政 12 年〈1800〉刊) のことであろう。書き題簽には「二」とあるので、「一」もあつたに違いない。



「国書データベース」には、東京国立博物館蔵『御慶礼者集』が登録されているが、「山東京伝／黄表紙／享和 2 刊(1802)」という書誌記事から見て、本書と同書か、あるいは、これが「一」である可能性もないではない。購入元の書肆の話では、本書は貸本業で大をなした大野屋惣八(大惣)に納められた特製本と言う。「礼者」は「年賀に回る人」の意で、正月刊行に因んで祝儀の意を籠めた題名かと思われるが、内容は特に正月に関わるものではない。

6. 亀田鵬斎 (1752~1826) 自筆 『^{かめたぼうさいせんせいしょ}亀田鵬斎先生書』 法帖一帖 文化 3 (1806) 年成
728.21/17//H

亀田鵬斎自筆の法帖で、水野稔先生蔵書で御遺族から寄贈されたものである。もとは縦長だった折本を見開きにして裏打ちをし、版型を正方形の折帖に仕立て直してある。表紙には後人の筆になる「亀田鵬斎先生書」という題簽が貼付されている。おそらく折帖を改装した人物であろう。最終帖オモテには、「文化三年丙／寅冬十一月／冬至前一日／鵬斎書 印 印」とあるので、鵬斎五四歳の作と知られる。印は上が朱文「太平／醉民」、下が白文「鵬／斎」。「太平醉民」印は誤って横向きに押されているところが御愛敬である。酒豪で知られた鵬斎の酔余の作かもしれない。



7. 振鷺亭主人 (?-1815) 著／蹄齋北馬 (1770~1844) 画 『^{かたきょうちねこまたやしき}敵討猫魔屋敷』 1冊 文化 5 (1808) 年刊 上総屋忠助・村田屋治郎兵衛板 913.56/SH1-4//H

本書は「国書データベース」では外題の『敵討猫魔屋敷』で立項されている。半紙本型よりもやや碎けた内容を持つ中本型の読本である。文化 5 年は読本が最も多く刊行されており、読本ブームのピークであった。本作もその時流に棹した作品である。敵討ちは、黄表紙から合巻への転換期に主流となった題材であり、この時期の読本においても定型的なテーマである。



振鷺亭は、寛政から文化年間 (1789~1818) に掛けて、洒落本、滑稽本、合巻など数十部の作をなしている。近世文学史においては群小戯作者の一人であるが、当時はそれなりの流行作家であった。絵師の蹄齋北馬は葛飾北斎の主立った門人の一人で、曲亭馬琴の読本の挿絵も多く描いている。挿絵画家としては、当時、歌川豊国や歌川国貞に次ぐ人気絵師であった。

8. 曲亭馬琴 (1767~1848) 作 / 勝川春亭 (?~1824) 画 『^{かなや はんしちうきなのあだうち まつのつきしんとうめいかん}刀屋半七浮名仇討 / 松之月新刀明鑑』
半紙本 2冊 文化7(1810)年刊 和泉屋市兵衛板 913.56/TA1-32//H

西尾市岩瀬文庫の蔵本は（「国書データベース」）、黄表紙体裁の上中下3冊本で、各冊が絵題簽を有している。この本はそれを半紙本型の上下2冊に仕立てた上製本で、その点で珍しい本である。なお、題名の「松」は原本では異体字の「寮」が用いられている。

本書は上下冊の各題簽の脇に、作品内容を謳った長い副題が記されているので、ここに記しておく。上冊

「^{そへぎや しんぎ やまとだましひそろ そろ やつしちごう ないところ}添鞘は信義の日本魂揃ひに揃ひし谷七郷の七所
^{こしら かくつば こうしん なんぼんてつきた きた あづまかぢ}拵へ / 角鏝は孝心の南蛮鉄釧ひも釧ひし東鍛冶の

^{こがねづくり おやざめ あくぼ ずうだまむく むく あふみち いんぐわものがたり つかいと ていちよ ちんはたむす むす}黄金作」、下冊「^{きそがは みさほぼなし}親鮫は悪婆の数珠玉報ひに酬ひし近江路の因果譚 / 靱糸は貞女の賃促織結びに締
びし妓阻河の節操話」。

これを見るだけでも、因果応報の敵討ちをテーマとする合巻が流行していた当時の傾向を見て取ることができるだろう。



9. 柳下亭種員 (1807~1858) 自筆稿本 『^{しらぬいものがたり}白縫譚』 第17編上巻1冊 嘉永7(1854)年以前成 913.57/Ry3-6//H

柳下亭種員の『白縫譚』第17編上巻の自筆稿本である。刊行は嘉永7年(1854)なので、原稿はそれ以前の成立であることは確かだが、合巻の製作過程を考えれば、草稿の成立と刊行時期はそれほど離れてはいなかったものと考えられる。展示されている17編上巻の刊本(913.57/Ry3-2//H)と比較して見れば、合巻執筆の実態に触れることができるだろう。

『白縫譚』は全90編の合巻作品中の最大長編で、柳下亭種員による初編刊行の嘉永2年(1849)以後、2世柳亭種彦(1世笠亭仙果)・柳水亭種清によって、40年間に渡って書き継がれた。56・57編の刊行は慶応4年(1868)で、58~90編は明治に入ってから刊行され、完結は明治18年(1885)である。また、72編以下は活字版で刊行されている。

なお、第65・70編の草稿が国立国会図書館に蔵されており、また、全編は佐藤至子校訂『白縫譚』(国書刊行会 2006.5)に活字化されている。



左：自筆稿本

右：刊本

10. 彩霞園柳香 (1857~1902) 著／梅堂国政 (1848~1920) 画 『むしろばたくんまのいななき 蓆旗群馬嘶』 3編9冊
 明治14 (1881) 年刊 金松堂 913.6/SA1-1//H

作者の彩霞園柳香は仮名垣魯文の門下で、『いろは新聞』『有喜世新聞』などの記者を務めるかたわら戯作にも携わり、のちに狂言作者となった。絵師の梅堂国政は3世豊国の門人で、豊国没後は2世国貞(4世豊国)に学び、明治22年(1889)に3世国貞を襲名している。

本書の題材は「中野秣場騒動」である。明治政府が入会地だった中野秣場を官有とした後、松之沢村が官有地から自村分を借り受け、他村の立ち入りを禁止したことで騒動となった。明治14年(1881)3月には農民五千人余りが竹やりなどを持って福島村金剛寺に集合し、暴動寸前となった。

同年中に刊行された本書は報道的性格の著作であって、その事件記録としての意義から彩霞園の著作の中では最も知られたものとなっている。



11. 松村桜雨 (生没未詳) 著／松齋吟光 (1853~1902) 画 『しょうへいこふくきんぶひざくりげ 昇平鼓腹三府膝栗毛』 3編9巻
 明治14 (1881) 年刊 島鮮堂板 913.6/MA1-1//H

明治期の草双紙で膝栗毛物の一類である。十返舎一九以来、膝栗毛物は膨大な数が出ており、それらは『膝栗毛文芸集成』全40巻(ゆまに書房)に集大成されている。作者は松村春輔、桜雨はその号。他に紅雪・柳東・基蛸なども号した。幕末維新に取材した実録小説『復古夢物語』『春雨文庫』で知られる。明治16年(1883)以降の消息は不明である。

絵師の松齋吟光は安達吟光の方が通りがいいかもしれない。師系や流派は明確ではないものの、始め役者絵を描き、明治10年(1877)頃から風俗画・時事報道画・美人画・挿絵などを多数描いた当時の人気絵師である。作画期は明治3~33(1870~1900)年のおよそ30年間である。

板元の島鮮堂は明治元年(1868)4月創業の板元(『東京書籍商組合史及組合員概歴』)である。



12. 伊東専三 (1850~1914) 編／河竹其水 (1816~1893) 披閱／歌川國峯 (1861~1943) 畫
 『^{しょうふだつきべんてんこぞう}正札附辨天小僧』 2編 2冊 明治 17 (1884) 年刊 滑稽堂 913.6/IT1-3//H

作者の伊東専三は、号は橋塘^{きょうとう}。浅草の菓子店の主人で、仮名垣魯文の門下に入り、『仮名読新聞』『有喜世新聞』『絵入自由新聞』などを渡り歩き、その間に本書のような戯作を発表した。披閱の河竹其水は河竹黙阿弥。其水はその俳名。通称「弁天小僧」の本外題は、『^{あおとぞうしはなのにしきえ}青砥稿花紅彩画』(文久2年<1862>3月 市村座初演)で、人気作ゆえ数多く利用・流用されたが、本書もその一類である。絵師の歌川國峯は、初世歌川国貞(3世豊国)の孫で、明治年間に主に単行本の挿絵を手がけた。中でも『当世書生気質』の挿絵を担当したことで知られている。表紙絵は月岡芳年(1839~1892)が描いている。なお、表紙を歌川國保(生没未詳)が描いた明治19年(1886)刊の日吉堂版の活字本もある。この時期、次第に木板本から活字本へ移行していったことを示す事例である。



13. 楊洲周延 (1838~1912) 筆 『^{ちかのぶ}馬琴著作當雙六』 1枚 明治 23 (1890) 年刊 森本順三郎板 798/15//H

曲亭馬琴の著作 18種を双六にしたもので、明治 23 年当時、馬琴の著作がどのように受け止められていたのか、その一端を示す資料と言えよう。

周延の作画期は、文久(1861~1864)頃から明治 40 年(1907)頃までの約 45 年に及ぶ。周延は、特に江戸城大奥を題材とした風俗画や明治開化期の婦人風俗画などを得意とした。また、美人画以外にも歴史画・役者絵・挿絵など、錦絵は 800 点以上、板本も 30 種ほどと多数に上る。明治期の浮世絵師を代表する絵師である。

ただし、この双六について言えば、絵面はあくまでも周延の画風であって、馬琴作品の雰囲気や彷彿させるものとは言いがたい気がする。



元予科長、小林秀穂教授の寄贈書（文学、哲学書 100 冊）をもとに、1947 年「小林文庫」として設置。日本文学の授業で、薫り高い文学書初版本に触れさせたいという考えに基づいたと伝えられる。

1991 年、元図書館長、故佐藤正彰文学部教授の旧蔵書を受け入れるにあたり、今の文庫名に改称した。コレクションは、明治から昭和戦前期までの文学書初版本を中心としている。近年では、文学史上重要な作家については、戦後の作品であってもコレクションに加えている。また、本学と縁のある作家の作品やその人となりを伝える自筆もの（署名本、草稿、書幅等）も収集している。

14. 三遊亭圓朝（1839-1900）口述；小相英太郎速記 『鶴殺疾刃庖刀』 明治 20（1887）年 11 月 薫志堂 MB100/SA19-5//W

高座にかけることなく『やまと新聞』（明治 20 年 1 月 20 日～3 月 11 日）に連載したものの単行本化。奥付の日付が同じで、表紙や装丁、奥付の売捌所などの異なる 5 種類の本が指摘されている（『円朝全集』第 4 巻岩波書店）が、本書はそれらとも少し異なる。河内の諸侯東条家に養子に入った氏勝は名君の誉れが高かったが、吹き飛ばされた陣笠を拾ってくれた女性（お藤）を妾にし、魂を奪われた。お藤の生んだ子を跡継ぎにと思い、既に養子に入っていた義兄の子を他家に養子に出そうとする。鶴を捕縛してほしいというお藤の望みを叶えようとして、氏勝は禁鳥の鶴を射殺してしまった。それによって、ようやく目が覚め、後のことを家老に托して切腹した。



15. 三遊亭圓朝（1839-1900）口述；小相英太郎速記 『松の操美人の生理：俠骨今に馨く賊胆猶ほ腥し』 明治 22(1889)年 5 月 榮泉堂 MB100/SA19-4//W

三遊亭圓朝による落語の速記本であり、西洋の作品を基にした翻案物の一つである。原作は大デュマの小説ポーリーヌ。その英訳本 Pauline, or, Buried alive を、福地桜痴が圓朝に口移しに教えたものを、圓朝が舞台を日本にし、登場人物も日本人にして、原作の趣向を壊さないようにうまく話を纏めている。東浦賀の廻船問屋で名主であった石井山三郎が、かつての意中の人お蘭が生き埋めにされたのを知り、土中から救い出した。お蘭が生き埋めにされたのは夫である^{かゆかわずしよ} 粥河凶書の秘密を知ったからである。夫の秘密を気にして自害しようとするお蘭を見守りながら、粥河との決闘、そして最後には^{おとこだて} 粥河を説諭して、罪を自覚させていく^{おとこだて} 侠客の話になっている。



16. 村上浪六 (1865-1944) 著 『深見笠』 明治 27 (1894) 年 2 月 春陽堂 MB100/MU2-3//W

村上浪六は歴史小説の名手である。この『深見笠』は、当代の拗ね者、髯の重左こと、素浪人深見重左衛門を主人公とする。彼は、太閤秀吉の腹心福島正則の旗下深溝又右衛門の嫡孫という設定である。22 歳の時、藤堂大学頭に召されて三千石で藤堂藩に仕えたが、亡主の仇によっては食むことを嫌い、編笠一蓋を形見に残して藩を去った。これがタイトルになっている。旧友（白輿三右衛門）を尋ねて藤堂藩邸に赴いたことにより、藤堂藩士との争い。また少年時代の旧友で町奉行になっていた北条安房守の家で出会った女性への初恋、白輿がその女性の父の仇であるという事実。そして北条安房守による流罪という、硬骨漢を悩ます恋愛や友情が描かれている。



17. 尾崎紅葉 (1867-1903) 著 『隣の女』 明治 27 (1894) 年 6 月 春陽堂 MB100/OZ3-20//W

エミール・ゾラの「一夜の愛のために (Pour une nuit d'amour)」(岩波文庫『水車小屋攻撃』所収) の英訳本をもとに翻案した作品。明治 26 年 (1893) 8 月 20 日から 10 月 7 日まで「読売新聞」に連載したもの単行本化。巻頭に武内桂舟の口絵がある。岩波書店版の『紅葉全集』の外函の装丁の図案はこの『隣の女』の表紙をもとにしている。この作品の筋は次のようである。平凡な醜い青年の下宿の隣家に妾が住み、青年が尺八を吹くと女性が三味線で合わせたので、青年は自分に好意を抱いていると考えるようになる。その女性は、誤って情夫を殺しその死骸の処理に困り、青年を色をもっておびき寄せ死骸を隅田川に流させた。青年も思いせまり入水した。



18. 小山内薫 (1881-1928) 著 『蝶』 明治 42 (1909) 年 4 月 水野書店 MB100/OS1-9//W

明治 41 年 (1908) 刊行の『窓』に次ぐ第二冊目の短編集。小山内は生前に 12 冊の短編集を刊行している。この『蝶』には明治 41 年 (1908) 5 月から 42 年 (1909) 1 月までに発表した 17 の小説が収められている。大正 7 年 (1918) 頃までは年 1 冊のペースで短編集を出していた。その他に専門の戯曲や演劇評論も発表していて、多作であった。この本の最初に「この書を島崎春樹氏に献ず」とあり、藤村への献辞が見られる。少年時代を描いた「十三年」「熊次の家族」、路上を観察した「巢鴨の鯉屋」「沈黙」、旅の思い出の「事業」「蝙蝠傘」「失明」「軍医の家」、風刺の「蚊」、内省を記した「粘土」、そして旅役者を描いた「堀田の話」「旅役者」「夢中」など、様々なテーマで執筆されている。



19. 谷崎潤一郎 (1886-1965) 著 『蕨』 大正 3 (1914) 年 3 月 鳳鳴社 MB100/TA30-42//W

橋口五葉(はしぐち・ごよう、1881-1921)の装幀。谷崎は本書を含めて、この時点で既に5冊を刊行しているが、全て橋口五葉による装幀である。橋口五葉は画家で、夏目漱石『吾輩は猫である』(明治38年<1905>)をはじめとして、多くの装幀を手がけている。本書は谷崎潤一郎の短篇集。函が存在するものは珍しい。「序」「憎み」(のちに「憎悪」と改題)、「熱風に吹かれて」を取録する。なお「蕨」というのは本書の書名であり、「蕨」というタイトルの作品は存在しない。



20. 永井荷風 (1879-1959) 著 『ふらんす物語：新編』 大正 4 (1915) 年 11 月 博文館 MB100/NA1-31//W

橋口五葉(はしぐち・ごよう、1881-1921)の装幀。発禁処分を受けた初版『ふらんす物語』(博文館、明治42年<1909>3月)を改訂し、「新編」と題して出版したもの。初版と比較すると10編が除かれ、5編が加えられている。永井荷風「書かでもの記」(大正7年<1918>)によれば、『ふらんす物語』発禁によるトラブルがもとで、版元の博文館とは関係が悪くなり、版元が強引に押し切って本書を刊行した経緯が記されている。



21. 尾形亀之助 (1900-1942) 著 『色ガラスの街：詩集』 大正 14 (1925) 年 11 月 恵風館 MB100/OG8-1//W

大正14年(1925)11月、恵風館刊。尾形亀之助は明治33年(1900)、宮城県生まれの詩人。画家を志すが、後に詩人に転向。その第一詩集が『色ガラスの街』である。生前刊行した詩集は、この『色ガラスの街』と、第二詩集『雨になる朝』(昭和4年<1929>5月、誠志堂書店刊)、第三詩集『障子のある家』(昭和5年<1930>9月、爐書房刊)の3冊である。いずれも少数の刊行であり、初版が流通することは極めて稀である。表紙の絵は尾形のものではなく、ドイツ表現主義の画家ハインリヒ・カンペンドンク(Heinrich Campendonk 1889~1957年)作の木版「室内ストーブの前の女」である。



22. 谷崎潤一郎 (1886-1965) 著 『蓼喰ふ蟲』 昭和 4 (1929) 年 11 月 改造社
MB100/TA30-43//W

初出「大阪毎日新聞」(昭和 3 年<1928>12 月 4 日~昭和 4 年<1929>6 月 18 日)、「東京日日新聞」(同~6 月 19 日)。谷崎の中期を代表する傑作。本書は洋画家である小出檐重(こいで・ならしげ、1887-1931)の装幀による。なお小出檐重は新聞連載時の挿画も担当した。谷崎は小出の挿画を高く評価し、本書の装幀を依頼したと言われている。作品の内容はもとより、新聞連載時の挿画、本書の装幀など、谷崎と小出の共同作業の側面が強く、昭和初頭の関西モダニズムの結晶ともいえる一冊である。



23. 内田百閒 (1889-1971) 著 『冥途』 再版第 3 版 昭和 10 (1935) 年 12 月 三笠書房
MB100/UC1-13//W

昭和 10 年 (1935) 12 月、三笠書房刊。『冥途』は内田百閒が最初に発表したアンソロジーで、大正 11 年 (1922) 2 月に稲門堂書店から刊行されている。しかし、単行本そのものとして有名なのは、断然にこちらである。再度刊行された 3 版で、谷中安規の大胆な装幀が印象的。内田百閒の作品で谷中安規の装幀では、その他に『王様の背中』(昭和 9 年<1934>9 月、樂浪書院刊)が有名である。収録された作品は表題作「冥途」のほか、「件(くだん)」など、いずれも幻想的な内容である。これらの作品は、いずれも内田百閒の師匠であった夏目漱石「夢十夜」と作風が似ている。



24. 永井荷風 (1879-1959) 著 『机邊の記』 昭和 11 (1936) 年 4 月 青燈社
MB100/NA1-30//W

当初「几辺の記」(「女性」大正 13 年<1924>11 月)として発表された随筆に加筆され本書(青燈社、昭和 11 年<1936>4 月)が刊行されている。広瀬千香の装幀による。広瀬千香は永井荷風『溼東綺譚』(私家版)の刊行に尽力した人物。のちに彼女は『私の荷風記』(日本古書通信、平成元年)で荷風を回想している。本書は全て著者自筆影印刷で 500 部限定である。荷風の筆跡はもちろんのこと、口絵は自画で机辺の図を描き、本文中に 7 図著者の描いたカットが収録されている。なお本書には別装本があり、龍紋染が施されている。



元早稲田大学文学部教授で文化人類学者・言語学者の西江雅之氏（にしえ・まさゆき 1937-2015）の旧蔵コレクション。文化人類学、言語学、美術書等の図書や雑誌約 6,700 冊を所蔵している。氏が現地で入手したアフリカ諸語（スワヒリ語、キトゥバ語、キクユ語、ズールー語、ヨルバ語、アムハラ語、サンゴ語など）や東欧諸語、アラビア語、ペルシャ語、チャモロ語、アラワク語、ピジン言語、クレオール語、マオリ語、中国語、タイ語など、様々な言語による資料が含まれている。

今回は、文庫の中から『不思議の国のアリス』各国語版を特別展示する。言語と文化の多様性を感じられるユニークなコレクションを、ぜひお楽しみいただきたい。

英語

25. ルイス・キャロル著；アートワーク：草間彌生 『不思議の国のアリス』 ロンドン 2012年 933.6/12//NI

Carroll, Lewis, 1832-1898 ; with artwork by Yayoi Kusama. *Lewis Carroll's Alice's adventures in Wonderland*. - (Penguin books)(Penguin classics) London : Penguin Classics, an imprint of Penguin Books , 2012



フランス語

26. ルイス・キャロル著 『不思議の国のアリス』 ニューヨーク 1972年 933.6/33//NI

Carroll, Lewis, 1832-1898 ; translated from the English by Henri Bué. *Aventures d'Alice au pays des merveilles*. - (Dover humor books). New York : Dover, 1972



スペイン語

27. ルイス・キャロル著 『不思議の国のアリス』 メキシコ 1953年
933.6/11//NI

Carroll, Lewis, 1832-1898 ; ilustraciones de John Tenniel. *Alicia en el país de las maravillas*. México : Editorial Diana, 1953



フィンランド語

28. ルイス・キャロル著 『不思議の国のアリス』 ヘルシンキ 2010年 933.6/16//NI

Carroll, Lewis, 1832-1898 ; kuvittanut John Tenniel ; suomentanut Alice Martin *Alicen seikkailut ihmemaassa*. - (WSOY pokkari) Helsinki : Werner Söderström Osakeyhtiö, 2010, c1995



オランダ語

29. ルイス・キャロル著 『不思議の国のアリス』 ロッテルダム 1982年
933.6/19//NI

Carroll, Lewis, 1832-1898 *De avonturen van Alice*. Rotterdam : Ad. Donker, c1982



ラトヴィア語

30. ルイス・キャロル著 『不思議の国のアリス』 リガ (ラトヴィア) 20--年 933.6/28//NI

Carroll, Lewis, 1832-1898 *Alises piedzīvojumi brīnumzemē : Alise aizspogulijā, un ko viņa tur redzēja.* - (Lasītprieks!) Rīgā : Zvaigzne ABC, [20--]



エストニア語

31. ルイス・キャロル著 『不思議の国のアリス』 タリン (エストニア) 1971年 933.6/29//NI

Carroll, Lewis, 1832-1898 ; tõlkinud Jaan Kross. *Alice imedemaal.* Tallinn : Kirjastus "Eesti Raamat", 1971



中国語

32. ルイス・キャロル著 『不思議の国のアリス』 北京 2010年 933.6/37//NI

Carroll, Lewis, 1832-1898 *爱丽丝漫游奇境记.* - (世界文学文库) 北京 : 北京燕山出版社, 2010



韓国語

33. 루이스·캐롤著 『不思議の国のアリス』 ソウル 1978年 933.6/7//NI

Carroll, Lewis, 1832-1898 *이상한 나라의 앨리스*. - (소년소녀 영원한 세계의 명작문고 ; 112)
서울 : 계림출판사, 1978



日本語

34. 루이스·캐롤著 ; 토베·얀손絵 ; 村山由佳訳 『不思議の国のアリス』 2006年3月
メディアファクトリー 933.6/47//NI



参考：展示品以外の西江雅之文庫「不思議の国のアリス」各国語版



**第 98 回 明治大学中央図書館ギャラリー展示
「新収貴重書展」 (2018～2020 年度収蔵)**

編 集：中央図書館ギャラリーワーキンググループ

解題執筆：1-3 蘆田文庫研究会

4-13 内村和至 (文学部教授)

14-24 日本近代文学文庫選定分科会

発 行：明 治 大 学 図 書 館

発 行 日：2026 年 6 月 1 1 日